

「教育臨床総合研究13 2014研究」

小学校音楽科における音楽づくりと鑑賞の一体化をめざした授業開発研究

A Study on the Development of Teaching Materials for the Integration
between Creative Music-Making and Appraising at Elementary School

田室 雛衣* 河添 達也**
Hinai TAMURO Tatsuya KAWASOI

要 旨

本稿では小学校音楽科における音楽づくりと「鑑賞」の一体化をめざした授業内容と方法の可能性について考察を行う。ペア学習の形態を取り入れ、より効果的な授業の在り方についても実践を通して言及した。さらに本授業実践を行うにあたって汎用性のある手作り楽器の製作も試みた。

〔キーワード〕 小学校音楽科 音楽づくり 鑑賞 手作り楽器

I はじめに

小学校音楽科の指導内容は「A表現」（以下、「表現」）と「B鑑賞」（以下、「鑑賞」）という2つの領域に大別される。そのうち「表現」は、(1)歌唱・(2)器楽・(3)音楽づくりの3分野から構成されている。本稿は島根大学教育学部附属小学校の第6学年における「木片で学校生活の場面に合った音楽をつくろう」を題材名とした授業実践を通して、音楽づくりと「鑑賞」の一体化をめざした授業内容と方法の可能性について考察したものである。

まず次節で今次の学習指導要領改訂のポイントについて省察していく。そして、これまでに行われてきた音楽づくりの授業の先行事例を概観し、問題の所在を明らかにする。それらを踏まえ、独自に開発した手作り楽器を用いた授業実践を行い、児童観察とアンケートの結果から、本実践の成果と課題を検証し、音楽づくりと「鑑賞」の一体化をめざした授業の有用性について明らかにしていく。

II 研究の動機

1. 学習指導要領の改訂

平成20年1月の中央教育審議会の答申において、小学校、中学校及び高等学校を通じる音楽科の改善の基本方針として、「思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力」の育

* 島根大学大学院教育学研究科

** 島根大学教育学部芸術表現教育講座

成、「音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力」の育成を一層重視することが示された。このような力の育成に向けて、平成20年改訂の第8次小学校学習指導要領（以下、学習指導要領）における音楽科の内容には、これまでの「表現」及び「鑑賞」の2領域に〔共通事項〕が新たに加えられた。

学習指導要領には、次のように示されている。

〔共通事項〕

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

ア 音楽を形づくっている要素のうち次の（ア）及び（イ）を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。

（ア） 音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和音の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴づけている要素

（イ） 反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組み

〔共通事項〕(1) アは「音楽を形づくる諸要素と形式」であり、それらを聴き取り（知覚）、その働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること（感受）で、学習を深めていくことが示されている。このことは、「鑑賞」の学習であれば、楽曲に込められた作曲者の思いや意図を、まずは音楽を形づくっている要素を通して知覚し、そののちに自らの想像やイメージを豊かに喚起するという学習の段階性を示したものと見える。さらに「表現」の学習においては、そのようにして得られたイメージをもとに思考・判断のプロセスを反復し、試行錯誤して、より豊かな表現へと醸成させる学習が求められているといえる。

つまり、結果としての技術的な向上のみならず、思考・判断の反復というプロセスにも学習の重点が置かれており、技術的能力と感性の醸成とを不即不離のものとして認識することで豊かな情操を養うことが、音楽科の目標とされているのである。なかでも、音楽づくりの学習においては、自らのイメージをどのような諸要素を用いて音響化したらよいかという、思考・判断の反復が重要となる。音楽づくりの学習には、特に、思考・判断の質と反復密度の向上とが求められるのである。

2. 音楽づくりと「鑑賞」の関連性について

「表現」と「鑑賞」の一体的な学習をめざすうえで、特に「表現」中でも音楽づくりに着目したのは、その指導事項の中に「鑑賞」との直接的な関連性を見出すことができるためである。

音楽づくりの指導事項アには「音楽を特徴付けている要素」を手掛かりとして、音の響きやその組み合わせを楽しみ、自分なりの発想を生かして様々な表現の仕方を探求すること、指導事項イでは「音楽の仕組み」を手掛かりとして、それぞれの音を関連付け、音楽へと構成していくことが示されている。つまり音楽づくりでは、音楽的な「統合のプロセス」を学習するのである。それに対して「鑑賞」の学習は、音楽的な諸要素を「知覚」し「感受」という「分析のプロセス」の学習といえる。このように、音楽づくりにおける指導事項は「鑑賞」の

学習過程と「統合⇔分析」という相関性があり、一体的な学習を行うことで、双方の領域により深い学習効果が得られるのではないかと考えたのである。

3. 言語活動の充実

学習指導要領の改訂に伴って音楽科においても言語活動が重要視され、特に「鑑賞」では感じ取ったことを根拠をもって言語化する活動が促されている。しかし音楽を聴いて、聴き取ったことや感じ取ったことを言語化することに、苦手意識や消極的な気持ちを抱いている児童が多く存在する。例えば平成20年度に実施された国立教育政策研究所による「特定の課題に関する調査」の結果によると、「鑑賞」に関して、約8割の児童が音楽のよさや美しさを感じ取ることが好きだと答えている。しかし一方で、音楽の特徴や演奏のよさを言葉などで表わすことが好きだと答えた児童は5割に満たなかった。「鑑賞」の活動では音楽を形づくっている要素の働きなどを感じ取り、根拠をもって自分なりに批評できる力を身につけることを目標としているが、そこに困難を感じている児童が多いと言える。

音楽科における言語活動は文字を書くこと自体が目的なのではなく、思考力・判断力・表現力を身につける手段として必要なものである。そのため音楽づくりにおいて、「知覚・感受」を支えとしながら、「音楽によって自分は何を表したいか、そのためにどのように工夫しようか」ということを言語を通して思考・判断し、他者と意見を交わしながら試行錯誤して音や音楽で表現できる力を育てたい。また「鑑賞」においては、聴いた音楽を「自分はどのように感じ取ったか、その根拠としての音楽の特徴は何か」ということを、言語などを用いて知覚・感受し音楽を深く味わって鑑賞できる力を育てたい。

Ⅲ 現状分析と教材開発

1. 先行研究の分析

新しい学習指導要領における音楽づくりと「鑑賞」の一体化をめざす先行事例にどのような実践があるのか、文献による調査を行った。その結果、大部分が「まず鑑賞の学習を行い、楽曲から聴き取った音楽を形づくっている要素を、音楽づくりに生かす（この後、さらに別の楽曲の鑑賞を行う）」という展開の報告である（例えば、和田 2009, 石井2013など）。これらの、既成曲からヒントを得て音楽づくりに生かす、という学習では、音楽の仕組みや曲の構造への理解を深めることができるという利点がある。しかし場合によっては、既成曲の模倣に終始してしまうという点に注意しなければならない。児童が自らの創造性を発揮し主体的な活動を行えるようにするための、より柔軟で興味深い授業展開を探る必要がある。

学習指導要領に〔共通事項〕が新設されたことにより、それを基軸として「表現」と「鑑賞」を関連させた授業実践はさらに注目を集めるようになってきている。一方、音楽科に携わる教師を対象にアンケート調査を行った石田（2011）の報告によると、教育現場においては、音楽づくりの活動を行うにあたり多くの課題があるという。①楽器が少ない、使用できる教室が少ないという環境に関すること、②時間がかかる、限られた時間で満足できる作品ができないといった時数に関わることなどが挙げられている。汎用性の高い教材や授業内容の開発にあたっては、このような課題を解決することを目的の1つに掲げる必要がある。

2. 教材開発及び授業方法の検討

(1) 授業で用いる楽器の製作

前述したように、楽器を使った音楽づくりは扱いにくいとされている。学校に人数分の楽器が揃っていることはまれであることから、グループ学習や交代しながら演奏することが余儀なくされるからである。数が揃えられたとしても楽器の準備、片付けに必要な以上のかかり、児童の演奏能力に差が生じたりするという問題も生じる。このような原因から、音楽づくりにおいて、児童一人ひとりが試しにやってみる、思考錯誤するといった時間が確保しにくいのである。しかし、準備が素早くでき、高度な演奏技術を必ずしも必要としない楽器を児童の人数分用意できれば、より効率的な授業が行えるはずである。

そこで本研究では簡易的な小型木琴の製作を試みた(写真1)。使用した材料はホームセンターなどで簡単に手に入るものばかりである。鍵盤にはヒノキ材を使用した。密度が高い木であるため音の響きもよく、音程も調整し易いからである。また、鍵盤

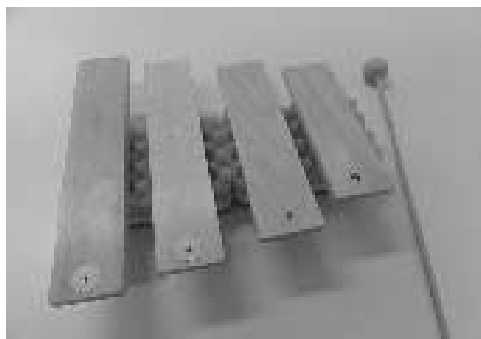


写真1. 小型木琴

を置く台座は、食器洗い用のスポンジを用いた。様々な素材で試したが、鍵盤との設置面積が少ない表面が波型にカットされているスポンジがよい音が鳴った。1セットずつ袋に入れ持ち運びやすいようにし、楽器のセッティングもスポンジに鍵盤(木片)をのせるだけなので、簡単で時間もかからない。鍵盤は4音のみで調性にこだわらない自由な旋法を用いた。調性感の明確な音階を用いると、児童の音楽経験の有無が、創造的な活動の場面に強く反映されてしまうのではないかと考えたからである。また、あまり大きな音が出ず響きが長く残らないため、教室内で30人が一斉に演奏しても、自分の演奏する音を明確に聴き取ることが出来る。まわりの教室に迷惑をかけるほど騒がしくならないことも考慮に入れた。

(2) 活動形態の工夫

授業実践の方法として、互いに自分のつくった作品を聴き合うペア学習の形態を取り入れた(写真2)。グループではなくペアで活動を行うことで、相手のつくった音楽を聴いて、相手の思いや意図を想像したり、自分の音楽づくりの工夫について話し合ったりして、よりよい音楽にするための試行錯誤の場を設定できると考えたからである。グループよりもペアの方が集中して相手の作品を聴くことができるし、より身近な雰囲気で作を発表できるであろう。少



写真2. ペア学習の様子

ない授業時間の中で音楽づくりと「鑑賞」の一体化をめざすことと、聴いた音楽を自分はどうのように感じ取ったか、その根拠としての音楽的特徴は何かということ、一人ひとりが自分の言葉で伝えあう、という言語活動の充実を、併せて狙った活動形態である。

IV 授業実践

本節では、前節で述べた手作り楽器を教材として行った授業実践の詳細について論述する。

題材名 木片で学校生活の場面にあった音楽をつくろう！

題材のねらい

強弱，リズム，速度を聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら，自分の思いや意図をもってつくったり，自分の音楽の工夫を相手に伝えたりすることができる。

実施日 平成25年12月3日（火）2校時，4日（水）6校時，17日（火）2校時

対象 島根大学教育学部附属小学校 第6学年2組

授業者 田室雛衣

附属小学校指導教員 神門洋子教諭

1. 題材について

児童に身近な学校生活をテーマとし，音楽で表現したい「学校生活の中のお気に入りの場面」を決め，そのイメージに合った音楽を木片の4つの音を用いてつくる学習活動である。「音楽を形づくっている要素」の中から特に「リズム，速度，強弱」に着目し，即興的な表現を通して，それらの要素が変化することで音楽の雰囲気が変わることを感じ取る。そして感じ取ったことを生かしてイメージに合う音を選び，児童それぞれが思いや意図をもって音楽づくりを行う。また友達がつくった音楽を聴き，気に入った表現を見つけたり，聴きとった「リズム，速度，強弱」を手掛かりにして，音楽がどのような場面や気持ちを表しているか想像したりして，感想を伝え合う活動を行う。さらに，互いの作品のよさを認め合い，相手の意図や工夫を生かしたペアによる音楽づくりへと発展させる構想を立案した。

2. 児童について

授業実践に先駆けて，児童の実態把握のための観察を行ってきた。児童は歌唱や器楽の活動で表現をすることに対してとても積極的で，休み時間にもリコーダーを吹いたり歌ったりしている様子が見られた。鑑賞の活動の際には集中して静かに聴いたり，音楽に合わせて体を動かしたりしており，それぞれが音楽を味わって聴いている様子であった。しかし聴き取ったことや感じ取ったことを発表する場面ではなかなか手が挙がらず，思いを言語化し，それを発言することに対して抵抗を感じているように思われる児童が多い。小さな声で呟いたり，ワークシートには自分の意見を書いている様子が見られるため，考えてはいるのだがその内容に対する自信の無さが，発言しにくい原因の1つではないかと考えた。そこで，音楽を形づくる要素（リズム，速度，強弱）を音楽づくりのポイントとして事前に示しておき，つくった作品を鑑賞する際にはそれらを鑑賞のポイントとすることで，児童が何に注目して聴いたらよいかを明確にすることにした。聴くポイントを明確化することで，児童の中にある言語化への抵抗を少しでも緩和したいと考えた。

3. 授業の計画と評価

題材の指導と評価計画（全3時間）

時	ねらい	学習内容	評価	評価の方法
1	○即興的な演奏を通して、音楽づくりのためのパターンを体験し、自分で設定した場面のイメージにあった音を見つけることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・4つの音だけでできている音楽があることを知る。 ・即興的な演奏を通して、音楽づくりのためのパターンを知る。 ・気持ちや場面にあった音楽にするためにリズムや強弱などを工夫して、自分なりの思いや意図をもってイメージに合う音を探す。 	ア	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・ワークシート
2	○友達のつくった音楽の工夫を聴き取り、場面や意図を想像したり、感想を伝え合ったりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージに合う音を組み合わせ、自分のテーマにあった音楽をつくる。 ・相手のつくった音楽を聴いて、気に入った表現を見つけたり音楽がどのような場面や気持ちを表しているか想像したりして、感想を伝え合う。 	イ ア	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・観察
3	○自分のつくった音楽の工夫した点や根拠を話し合い、ペアで協力して音楽をつくることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のつくった音楽の工夫やその根拠を説明し合い、相手の工夫を生かして、お互いの作品を2人で演奏できる形へ発展させる。 		

題材に即した具体的評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫
題材の評価規準	即興的に表現することに親しみ、イメージを音楽にしていくことに関心をもち、意欲的に学校生活の場面を表す音楽づくりに取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。
学習活動に即した評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・即興的に表現することに親しみ、様々な表現を試して、イメージに合う音を探し音楽をつくらうとしている。 ・ペアで聴きあったり感想を伝え合ったりする活動に主体的に取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・強弱やリズムを聴き取り、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、イメージに合う音楽にするために、表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図を記述することができる。

4. 授業の実際と児童の様子

—1 時間目—

導入として3つの活動を行った。まず学校の始業のチャイムとコンビニの入店音を聴かせた。これらはどちらも同じ4つの音からできており、児童に馴染みのあるメロディである。児童からは同じ音しか使っていないことに対して驚きを示した発言もあり、たった4つの音でもアイデア次第で印象的な音楽を創造できることに気付かせ、学習意欲を喚起させるために有効な導入であったと考える。次に音楽づくりの準備体操として、即興的にリズム、速度、強弱などに変化を加えて演奏してみた後に、それぞれどのような感じがするか話し合う活動を行った。すぐにイメージしにくい様子であったため、どちらかというとき明るい・暗い、楽しい感じか・悲しい感じか、など選択肢を示してイメージさせた。これはイメージと音とを結びつけることの導入的な役割を担う活動である。そして自分で音楽づくりを行うためのテーマを設定し、即興的に何度も音を紡ぐ反復活動を通して、イメージにあう音を探していった。授業後のふりかえりで「大きさや速さで音楽が変わるので工夫したいです。ジョーズの音楽も少しずつ速くなって行って、こわい感じを出すのにそれも大切なことだと思います。」と感想を書いている児童も見られ、本時の活動が、イメージと音とを結びつける学習に結びついていることが伺えた。

—2 時間目—

前時で選択した音や即興的な短いフレーズを組み合わせて音楽を再構築する「思考・判断の反復」の活動を行った。その際、自分で工夫したことをワークシートに細かく記述させた。これは自分が即興的に行ってきた「統合」の過程を客観的に振り返るとともに、次に行うペア学習の際に自分の思いや意図を言葉で相手に伝えられるようにすることを担った活動である。相手に伝えるためには、まずは自分の思いや考えを言語化できることが前提である。記述を丁寧に行うことで、児童同士の話し合い活動の充実を促せるのではないかと考えた。自分の意図を、自ら言語化して振り返ることで、相手の作品も、その意図がどのような諸要素の変化に反映されているのか、ポイントを焦点化して聴き取ることができるであろう。このように自分の考えを他者に伝えることは、音楽づくりの活動を深めるうえで大切な学習過程であるので、ペア学習の時間を予定より長く確保して、一人ひとりが思いや意図を言葉で話しやすい場を設定するよう心がけた。

—3 時間目—

3時間目は当初の予定ではクラス全体での作品発表を行うこととしていたが、2時間目まで終えたところで児童の活動の進捗に大きく差が生じたことから、学習進度によってクラス全体を2つのグループに分け、活動の到達目標を2段階に設定し直した。個人の作品づくりを終えたペアは、その作品をもとにペアによる二重奏の作品づくりを行わせ、残りのグループは個人の作品の完成を目指させた。事前に前時に回収したワークシートへのコメントを丁寧に行い、個別指導の時間を確保して学習進度の調整を図った。まわりの友達と話し合いながら活動できる自由な雰囲気にするよう心がけたため、途中遊んでしまう児童も見られたが、友達と聴き合

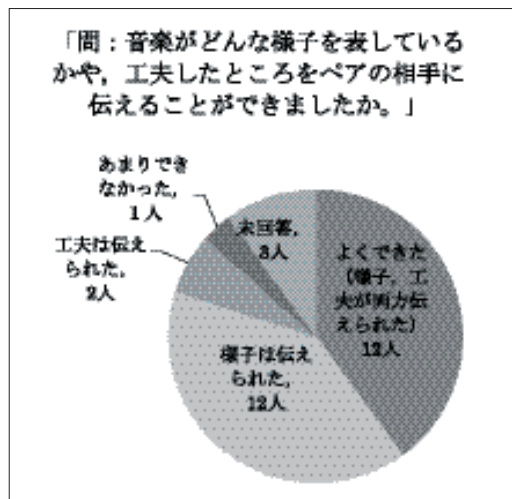
い何度もつくり直している様子が見受けられた。最終的には全員が自分の音楽をつくることができ、ペアでその工夫について話し合い、演奏を聴き合う時間を設けることができた。

児童の感想には、「最初音だけで伝えるのは難しかったけど、しっかりと自分の工夫を伝えられたのでよかったです。」「まだみんなに伝わりにくいのが残念だったけど、考えるのは楽しかった。」「今日友達の作ったものを聞いて、同じタイトルでびっくりしました。内容が全然ちがって、感じ方は全然ちがうなと思いました。」などの記述があった。

V まとめ

本稿では、小学校音楽科における音楽づくりと「鑑賞」との一体的な学習をめざした教材開発及び授業実践を行い、その内容と方法の可能性を考察してきた。その結果以下の3点について成果を確認することができた。

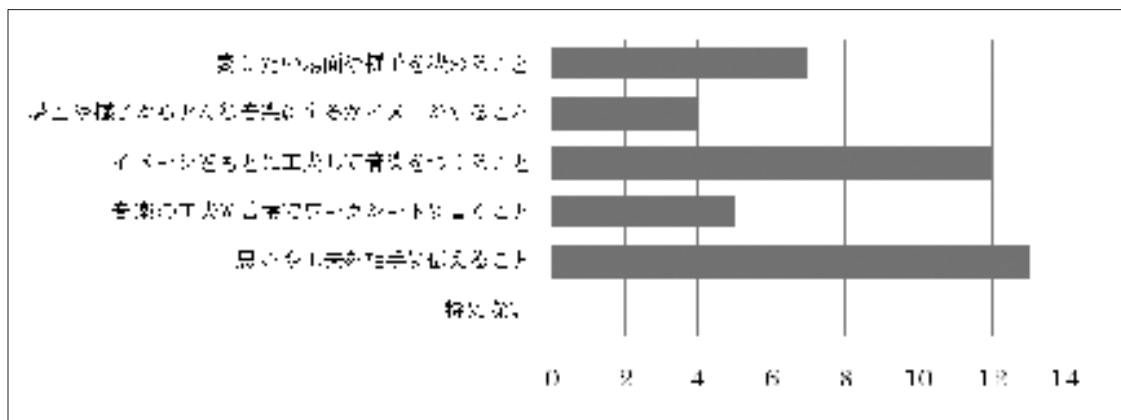
1点目として、ペア学習の効果が伺えたことである。先行研究や実践報告によると、音楽づくりはペア学習よりも規模の大きいグループ学習の形態で行われているものが多い。グループ学習には、児童が相互に影響しあうことができ、活動が深まるといった利点がある。しかし、数人の児童の意見のみによって全体の活動が進んでしまうという危険性も持ち合わせている。本実践ではペア学習を行ったことで、相手との1対1のやり取りを通して一人ひとりが主体的に活動し、思考・判断の学習を反復して深めることができたように思う。1時間目にはまだはっきりとしていなかった自己のイメージが、異なる感性をもつ他者とのペア学習によって、少しずつ深まり、その縁取りが明確になっていった。その様子は何度も書き直したワークシートからも伺えた。事後に行なったアンケートからもペア学習の効果が表れているといえる。



2点目の成果として、汎用性のある手作り楽器を製作できたことが挙げられる。安価で比較的簡易に製作できる手作り木琴ではあるが、この楽器を用いたことで、児童が思いついたアイデアをすぐに音にして試すことのできる環境を整えることができた。これによって児童の学習意欲を保持でき、相手の作品を集中して鑑賞する姿勢を促すことができたと考える。

3点目の成果は、聴き取り、感じ取った音楽の諸要素とイメージを、自分の作品に反映させようとする学習の深化によって、本研究の目的である、「表現（音楽づくり）」と「鑑賞」の一体化をめざした授業開発の一端を、ある程度提示できたことだ。児童が、自分の思いから生まれた旋律を、「もっとこのようにしたら相手に伝わるかな」と何度も書き直す姿が印象的であった。総体的に、児童も学習活動を楽しんでいた様子は、以下の事後アンケートからも伺える。

「問：3時間の活動の中で楽しかったことは何ですか。(複数回答可)」

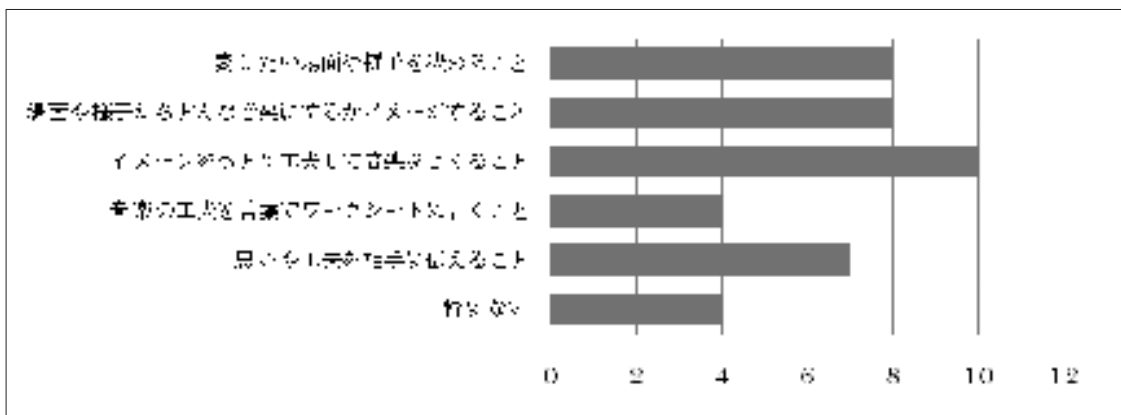


一方で積み残した課題も多い。今後の研究に向けてここでは以下の4点にまとめる。

まず、授業実践においては進行に手間取り、当初予定していた、クラス全体での作品発表を行うことができなかつた点である。「鑑賞」の活動が、ペアとなった相手の作品を通じた学習のみに終始することなく、もっと多くの(既成の楽曲も含めた)作品に触れる機会を提供することが大切だと感じた。

2点目は、鑑賞の学習を通して気づいた音楽の諸要素やイメージを、どのように自分の作品に生かしていったらよいのか、より細やかな指導を行う必要があると感じたことである。指導要領で唱えられる「即興的な表現」から「音楽づくり」への学習の深化を促すための具体的な方法を考案していきたい。次のような事後アンケートからも、これらの問題点が伺える。

「問：3時間の活動の中で大変だったことは何ですか。(複数回答可)」



3点目として、今回の授業実践では、明確な評価規準の設定が行えなかつたことが大きな課題である。発想の豊かさと個人の思いを重視する音楽づくりの学習にとって、その成果をどのように評価と結び付けたらよいのか、今後研究を重ねたい。

最後に、的確な指導言や場面に応じた柔軟な判断など、授業技術の未熟さも痛感した。多くの実践を体験しながら、授業技術の向上も図りたい。

引用・参考文献

- 1) 石井ゆきこ (2013) 「表現と鑑賞が相互に生きる関連を目指して」『音楽鑑賞教育』第518号, pp.6-11.
- 2) 石田佳裕 (2011) 「小学校音楽科の『音楽づくり』に関する研究」『平成23年度修士論文・修了研究報告書の概要』金沢大学大学院教育学研究科, pp.120-123.
- 3) 江田司 (2011) 「鑑賞と関連付けた音楽づくりの授業」『初等教育資料』第877号 (2011年9月号), pp.58-61.
- 4) 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2008) 「平成20年度特定の課題に関する調査 ペーパーテスト・実技調査集計結果及び質問紙調査集計結果－音楽－」
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_ongaku/syuukei_001.pdf (2014/02/24にアクセス)
- 5) 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2010) 『評価規準の作成のための参考資料 (小学校)』国立教育政策研究所教育課程研究センター.
- 6) 佐藤日呂志・坪能由紀子 (2009) 『平成20年改訂小学校教育課程講座・音楽』ぎょうせい.
- 7) 島崎篤子 (2010) 「日本の音楽教育における創造的音楽学習の導入とその展開」『教育学部紀要』第44号, 文教大学教育学部紀要委員会, pp.77-91.
- 8) 高倉弘光 (2012) 『〔共通事項〕が見える 子どもがときめく音楽授業づくり』東洋館出版社.
- 9) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社.
- 10) 和田和美 (2009) 「授業のエキスパート養成事業 (第5学年音楽科) 授業実践記録」愛媛県総合教育センターホームページ,
http://www.esnet.ed.jp/center/cdata/shiryo/expert/17horie/h21_horie_kiroku.pdf
(2014/02/24にアクセス)
- 11) 『教育音楽－小学版』音楽之友社 2008年4月号から2013年3月号まで.